

AIC Color 97 Kyotoで思ったこと

Lucia R. Ronchi AIC会長

1997年5月30日、34カ国からの代表は、形容するの
がやや難しい会議を終えて、それぞれ京都国際会館を
去っていった。よく組織された、レベルの高い、成功
した、あるいは他のどのような言葉も、あの熱気を表
現するには妥当でないように思われる。

主催者は会長が秋田宗平先生、前会長が神作博先生
である日本色彩学会であったが、お二人は納谷嘉信先
生、小町谷朝生先生、池田光男先生らのいろいろな委
員長に助けられていました。その結果、大会は、いろ
いろな研究室で生産された過剰とも言える結果から、
真に保存に価値のあり、かつ21世紀に向けて意味のあるものを抽出するという役割を果たすことができたのである。

大会は「日本における色と質」という特別講演を、
平山郁夫先生のような権威者から直接聞くことから始
まった。続いて、国際的に著名な招待講演者たちが、
色彩科学の絶えざる進展を支えている彼らのグループ
やチームの成果を紹介したが、それはまるでスポット
ライトを浴びるステージ上の出演者のように注目を集
めていた。

600名の出席者のうちの300名以上が日本人であった。
これは注目に値することである。多くの国では、残念
ながら研究者の間に溝が存在している。ところがこの
日本では、色彩科学は3世代にわたって連綿と続いて
おり、かつ、それらはお互いに融合し、この国の色彩
科学における教育努力に成功し、伝統の継続を保証し
ている。

AICの考えはこの大会の枠組みの中にうまく含め
られていた。京都ホテルで持たれたバンケットでの鏡
開きにおいて、これからの1998年から2002年まで
AICの会長を務める池田光男先生は、AICの発展を
祈念して樹を挙げようと提案された。優美、伝統、本
当の友情、全てがユニークで記憶に留めたいことであ
った。

紙面の制限があるが研究内容にも少し触れておきた
い。古典的（局部的）な色彩学が、種々の分野で応用

されていること、そしてマネージメントやデバイスイ
ンデペンデンシーでも活用されていることが報告され
た。再現された像の質の評価は、従来の計測の段階を
越えて、心理物理学的また心理的な評価の段階へ進ん
できた。たとえば、自然さというようなものも尺度化
されつつある。心理学者は京都においては脚光を浴び
た存在であり、彼らは、網膜での色コーディングから
始まり、初期の視覚の境界を経て、認識まで積み上が
っていくピラミッドの頂点を形成する感情、好み、調
和などの影響の定量化にも挑戦しようとしている。

京都では多次元的な研究手法が紹介された。すなわ
ち、多チャンネル視覚モデル、包括的な見え、異なる
感覚の連合による知覚、文脈、記憶、学習などであり、
すべて実験室から実際の場に出た研究であった。中
でも注目したいのは、ここ数年にわたって発表してき
た池田光男先生の認識レベルでのモデル化であろう。

結語としては、環境色彩の傘の下に展開され、段階
的な拡大を示しつつあるいくつかの研究に触れておく。
すなわち、室内については、オフィスから劇場へ、さ
らに振り付けと色、色彩公害など、また都市景観につ
いては、建築物のファサードから色コード、そして建
築と融合した景色へ、などである。最後には、斎藤美
穂先生によって発言された太陽の色を上げておく。こ
れはもう哲学の世界である。（訳 池田光男）



着物姿のロンキAIC会長